

坂本城 を考える会 ニュース

坂本城を考える会発行
発行責任者
天田 省三
大津市下阪本5
丁目10-6

4月18日/下阪本市民センター 第4回総会を開催

木村 至宏 名譽教授 記念講演 私の見た光秀像



河村副会長のあいさつの後、本田幹事を議長として、平成21年度実施事業を山岡幹事から、21年度決算を渡辺幹事から説明

第2部で講演中の木村 至宏成安造形大学元学長

し、また平成22年度事業計画案を梶原幹事から、22年度予算案を渡辺幹事から説明し、さらに平成22年度役員案について梶原幹事から説明、討議が行われた。質問として、「寄付金を予算として掲げるべきか否か」、「坂本城の構造はどこまで分かっているのか」があったが、それらについては渡辺幹事と梶原幹事が答へ、平成21年度実施事業と決算、平成22年度事業計画案と予算案がともに承認された。役員も変更になり、新役員の紹介と河村副会長よりお礼のあいさつを行い、総会は終了

- 1 21年度運営方針を継承し、事業を展開
- 2 2年後（平成24年4月）には坂本城復元計画を提案できるような活動推進
- 3 「活動計画」
- 1 光秀関連遺跡の観光チラシの作成（7月）
- 2 ボランティアアガイドの養成講座（9月）
- 3 下阪本学区文化祭に参加継続（11月）
- 4 会報ニュースの発行

具体的な年間事業計画が決まる

5月11日に役員会を開催し、総会で決定した年間の事業計画の具体化と、役員の仕事分担を決定した。

- 5 講演会を開催します（本年は養成講座を開催・来年度総会時開催）
- 6 日帰りバス研修会を実施します（10月）
- 6 坂本城趾公園の清掃活動を年三回行います（6月13日・9月・3月）
- 7 坂本城跡地の考古学的調査
- 8 考古資料・文献資料のまとめと発表

パワーアップ・市民活動 応援事業に採択される

「坂本城復元を目標に郷土の歴史を知る」を提案事業として、大津市パワーアップ・市民活動応援事業に応募したところ、書面審査・公開プレゼン審査を得て採択されました。今後はその内容を年間事業計画の中に組み込み、事業展開します。

■審査委員会委員の事業に対する講評

- 明智光秀と坂本城は有名であり、坂本城の復元という大きなテーマに向かって取り組む活動を評価
- 坂本城の歴史的意義、文化資産としての意義など、今後益々研究を重ねる期待
- ボランティアガイドの育成により、地域を知り、来訪者へのガイドで地域活性化につながる
- 伝統遺産、宿泊設備、美術展時場所など、地域おこしの起爆剤として期待できる

- 9 坂本城復元に向けて、県・市などへのアピール
- 10 月1回の役員会の開催と会員の増加
- 「新年度役員」
- 会長 天田 省三
- 副会長 河村 益孝
- 幹事・会計 渡辺 豊
- 幹事・広報 藤本 一也
- 幹事・事務局 梶原 大義
- 幹事・並木 益雄・中田 安子・成宮 律子 監事 坂手 孝夫・山岡 周天
- 顧問 日花 基次・篠原 弘

近江の安土城・坂本城を懐古

横山高治

戦国乱世。織田信長が近江八幡の安土山築いた安土城は「天下二」、歴史に残る名城、それに次ぐ明智光秀の坂本城(大津市下阪本)は国宝姫路城など優美な連郭式天守の先駆であった。

安土城は天正4年(1576)着工。日本60余州のほぼ中央、琵琶湖に突き出た110m、個水面より高い小丘にそびえた壮大な城郭。天守は穴蔵1階を含む5層7重。イラカは金色に輝き、座敷うちには黒ウルシ塗りの壁を配し、狩野永徳の名

画が並び、安土桃山文化を開く。しかも城下には諸大名の屋敷群と、「楽市楽座」の城下町が出現、日本の歴史を変えた。しかし完成後わずか三年、天正10年には光秀の本能寺の変のあと炎上。残念ながら三重県伊勢市二見の戦国時代村に「復元」、おもかげは草むす安土山に遺構を偲ばせるのみである。先日、この築城をドラマにした映画「火天の城」を見た。すばらしかった。特殊撮影された築城シーン、比



作成中の観光チラシ

良・比叡の広がる美しい湖の景観に感動し、主演の西田敏行・大竹しのぶ夫妻ら豪華な配役陣の名演技に、胸が迫り、涙

を押しさえた。巨岩を巧みに操る坂本穴太衆、神木(ヒノキ)に命をかける木曾の柚人、カリスマの信長、バカバカしい武者たち、迫力満点だった。

実は老生、若い頃、昭和30年から大津・高島に9年間在勤、湖国熱愛族である。

とくに琵琶湖の汚染に警鐘を鳴らし、農薬の空中散布に反対。一方、比叡山や三井寺に親しみ、環境保護と歴史文化にささやかな貢献をした浅学である。拙作の歴史書も書いた。

だから昭和35年ごろ、安土城復元運動が起こり、文化庁や滋賀県が反対したのが残念。近頃では、若輩が

言い出した頃には声もあげず、今頃になって環境保護を騒ぎ出し、ダム反対・栗東新駅反対・安土町の近江八幡反対、なんでも反対のクレームにあきれかえっている。

一世紀もたつて、豊臣秀吉ゆかりの長浜城の復元を誇り、山内一豊夫妻の大河ドラマに喜んだ。できれば、

安土に安土城と坂本に坂本城が復元されるまで長生きしたいものだと思っている。時々、三井寺や西教寺にお参りし、坂本城趾も散策、「琵琶湖周航の歌」など口ずさみ、大学同窓の天田省三君ら「坂本城を考える会」の活躍を喜んでいる。

城跡に こぶしを握る わらびかな

私が見た光秀像

木村至宏成安造形大学名誉教授記念講演要約

明智光秀の関連年表から、光秀と坂本との関連は深く、坂本城とともに光秀の天海説もあり、比叡山延暦寺との関連も伺え、また坂本には光秀の刀を所有する天田氏もいる。

従来から、儒教の教えとして主に対する謀叛への反発から、明治時代になっても光秀も評価は悪い。しかし光秀は文武両道を兼ね備えた人物で、戦死した兵士のために西教寺に供養米を寄進するなど、上下の差別をしない人物で、比叡山焼き討ちにあたっては信長をいさめたという記録が「天台座主記」にあり、正義感の強い、心の優しい人物であったとされる。

また亀岡では「光秀公」呼称され、坂本にも明智光秀公顕彰会があり、ここ下阪本でもなにか光秀を称えるものを計画すべきではないか。

坂本城の復元には、山城に比べて平城の復元は困難であり、また城の構造の判明が必要である。NHKで坂本城の外観が放送され、これらも含めて、天主の行動がどうであったかを調べ、現世代で無理であれば次世代に引き継ぐようにすべきである。

また坂本城復元にあたっては、文化と経済とは両輪として進めるべきであることを訴えるべきだ。(文責: 梶原大義)

天海僧正異聞

山崎隆朗

江戸初期の頃、織田信長、明智光秀、豊臣秀吉らの噂が、まだ生々しく語られていた。この武将らに関する書物も、次々と出されていった。そんな時期に魔人と呼ばれ、人々の関心を集めた謎の人物がいた。天海僧正である。

幕閣体制もようやく整い、誰もが世の平和を享樂しはじめたとき、突如として、家康の前面に現れ、徳川幕府の影のブレンとして知られはじめた天海に、人々は異常な関心を示したのである。濃い霧の彼方から、突然出現したような、しかもそれ以前の経歴は漠として、祥らかでない天海であったから、人々が魔人と呼ぶのは、当然といえれば当然であった。

天海は光秀だ。光秀は山崎の合戦で秀吉に敗れはしたものの、死んではいなかった。

たのだ、まことしやかにその言いつのる人々もいた。事実、明智光秀が、山崎から敗走の途中、山科小栗栖の山中で、土民の竹槍に貫かれて落命したという説には、いくつかの疑問点もあり、素直に首肯できない。だが、天海が光秀だとするには、決定的な無理がある。

年齢である。家康が豊臣方の建立した方広寺大仏殿の鐘楼の鐘の銘に難ぐせをつけたのは、慶長十九年（一六一四）で、後に大阪冬の陣につながった。この策を進言したのは天海僧正とされている。天海僧正が光秀だとすれば、その年齢は八十六歳を超えていることになる。このあと三代家光まで仕えるのはどうみても無理がある。

方広寺事件は、家康七十五歳のときのこと、既に当時としてはかなり高齢な

二人が、後の戦いにつながるような策を奔するだろうか。天海はもつと若くなくてはならない。では、天海は誰なのか。光秀に関する史料や書物を江戸時代と、現代を問わずひもといていくと、面白い話につき当たった。明智光秀が、妻木勘解由左衛門の娘、お熙を娶ったのは一十六歳のときであった。それ以前の光秀に愛人がいたという説である。名前も桔梗と記されているが、これは眉唾である。明智の家紋が桔梗であったことに、因んでいると思われる。便宜上、この名前を使うことにする。

明智光秀と桔梗は正式な夫婦となることなく終わっている。家柄が釣り合わないとか、いろいろな理由があったのであろう。二人の間に男の子が一人生まれていた。この男子が元服近くになるまで、桔梗は密かに慈しんで育てらしい。光秀はこの子の元服を待つて妙心寺に預けた。当時の住職は慈暉と言った。光秀はこ

の子に素状を記す書状を添え、慈暉に養育を託した。桔梗はそれを機に光秀の元を離れ、京都御所の女官となった。桔梗はそれから五年を経て没している。

光秀はお熙と結婚してからは、側室を置かず四男五女に恵まれていた。しかし、この九人は、光秀が本能寺に信長を弑殺したあと、秀吉側の手で、あるいは、そこから派生した争いによって、全員断罪され、ありいは白刃して果てている。表面は、これで明智の血は絶たれたかに見えた。光秀が人知れず妙心寺に預けた男子一人を除いては。

慈暉和尚は、この子に南光坊という名を授けた。一年後、慈暉は南光坊に比叡山に上がるよう勧めた。南光坊の素養が人並みはずれていることを見抜いたから

であった。南光坊十六歳のときである。

比叡山天台座主は応胤といた。光秀の書状と慈暉和尚の添え書きは、応胤の手許に保管される。南光坊の棲ぎましいほどの習学、精進が始まった。万巻の書も読破し、天文、薬草、薬学の知識を習得した。天台の教えも理解できるようになった。十四年の精進は、応胤もこれを認めざるを得



大津市坂本・慈眼堂/天海(慈眼大師)の廟所



埼玉県川越市・喜多院の天海銅像

ないほどであった。南光坊は二十九歳になっていた。応胤座主はある日、南光坊を傍らに招き、精神、勉学の成果を讃え、「既に世の中は治まった。南光坊よ、これ以降は武蔵国、川越の無量寺に入り、住職をして努めを果されよ」と、自らの添え状二通と光秀の書状を、南光坊に託したのである。「何年か後には、徳川家康殿にお会いされる時が、きっと参ろう。次の天様は家康様じゃ。そのとき、この書状をお見せするがよい。きっとよきことがおころうぞ」そう言いながら南光坊を見つめ。「世

の中、治まったといえ、何があるか解らぬ。ご自分の素状は、人には口外されるな。そなたは、今後、智楽院と名のるがよい。この名は、由緒ある貴い名ぞ。応して、これからを過ごせるがよい」智楽院は、座主に見送られ、東国に向かって旅立ったのである。智楽院は、そのまま川越へ入るとはなかった。父、光秀が諸国を放浪し多くの知識を身につけたように、東北の地を行脚した。その途中、今津の良源寺を訪ねると、住職の許しを得て客僧としてとどまり、寺内で法話を受け持つように

なつた。やがて智楽院の法話は、大勢の信者を得る。光秀ゆずりの美貌と、よく響く声は、人々を魅了し、良源寺の門前は人で溢れたという。智楽院の薬草と薬学の知識は、病に苦しむ多くの人を治し、その名声はさらに高まったのである。川越の無量寺に入ったあと、その名声はますます確かなものとなり、東北から関東にかけて、智楽院の名が響いた。智楽院が三十半ばを越えたとき、天海と名を改めた。天海僧正の誕生であった。このとき、彼の名声は遠く江戸城にまで響いていた。家康自身も、深い関心を持っていた。密かに、天海のことを調べたであろう。判明したのは、天海が当代随一の学僧であったこと、天台の奥義を疾く弁えていたこと、そのけれん味のなさに、熱烈な信者が多数惹かれていたことなどであったという。家康は、天海を江戸

城に招くための方策を練った。天海は、家康のために天下泰平を祈願するという口実のもとに、江戸城を訪ねることにした。家康四十九歳であったと記述にはある。当日、天海は黒い袈裟を身にまとい、端然として家康に対した。家康の側近に持参した扇子と、応胤座主から手渡された、父光秀の書状と座主の書状を差し出し、深く平伏した。家康が扇子を開くと、そこには鮮やかに水色桔梗が描かれていた。家康は、はっとした表情になると「この桔梗はそなたの家紋であるか」と、訊ねた。「はい。わが父のそれが唯一の形見でございます」家康は差し出された書状を手にとり、やがて思い切ったように、古い書状の封を開いた。一読、啞然とした表情の家康は「そなたは、明智光秀殿の一子であったか。よく生永えていたものよ。光秀殿については、懐かしい記憶もいっぱいある。そうか、そうであったか」と、感に耐

えなかったという。「そなたは、暫く城に留まりて、話を聞かせてくれ」天海は、いったん川越へ戻り、改めて家康の元へ迎えられる。「常にわが左右に従いて、われを支えよ」家康は、天海を篤く過した。家康の申し送りにより、秀忠、家光まで、三代にわたる幕府のブレーンが、姿を現したのであった。慶長二十年（一六一五）正月、還暦を迎えた天海は三十年ぶりに比叡山に上がった。応胤座主は既にない。天海は、「慶長二十年二月十七日奉寄進 願主光秀」と、父の名を刻んだ石灯籠を寄進している。天海の胸中には、父光秀を偲ぶ熱い思いが去来していた。参考 フロイス 日本史 吾妻鏡 新人物往来社 明智軍記 明智軍記 明智軍記異聞 「石亀の妖術」風涛社 津軽隠密秘帖 河出書房新社 徳川実記

歴史から見た、私たちの「土佐」

明智光秀と龍馬

副理事長 坂本世津夫（高知大学）

「時は今 天が下しる 五月かな」、これは天正10年（1582年）5月に明智光秀が「本能寺の変」の直前に詠んだ百韻連歌の発句（第1句目の歌）である。

それから428年が過ぎた今、土佐は、NHK大河ドラマ『龍馬伝』で活気づいている。まさに、「土佐は今 天が下しる 五月かな」である。数年前には、NHK大河ドラマで『功名が辻』が放送された。しかし、そこに描かれている土佐は、私たちの「土佐」とはかなり違うのではないかと感じる。「土佐学」でも、やはり歴史からみた真実の土佐を描きなす必要性があるのではないかと思ひ、今年「明智光秀と龍馬」を切り口に、私たちの「土佐」をできるだけ正確に描きだしてみたいと考えている。さて、420年前まで南

国市の北部には長宗我部元親の居城である岡豊城があった。南国市は、土佐のまつりごとの中心地であった（土佐のまほろばと言われている）。現在の高知市付近は、その時代は浦戸湾とそれに流れ込む河川（鏡川・国分川）の大デルタ地帯ではなかったかと想像される。一宮にある土佐神社の直前まで、干潟が続いていたのではないか、そして「比島」も島、「かづらしま」も島

「高須」は干潟など、その面影は現在の地名にも残っている。すこし、ややこしくして堅い記述（無味乾燥的な記述）になるが、当時の状況を想像して頂きたい。長宗我部元親は、長宗我部第19代当主・長宗我部国親の長男で、第20代当主である。母は、美濃斎藤氏

の娘（号祥鳳）。正室は、石谷光政（足利義輝の家臣）の娘で、石谷頼辰・斎藤利三の異父妹である。

側室には、明智光秀の妹の娘がいる（側室：小少将明智光秀の妹の娘）。長宗我部元親の夫人は、天正11年7月22日（1583年）、本能寺の変の翌年に亡くなっている。亡くなった原因も、墓所も不明である。夫人の正式な名は不明であるが、司馬遼太郎の『夏草の賦』では「葉々」という名前が付けられている。父は石谷光政、母は蜷川親順の娘である。そして、長宗我部元親の嫡男である信親（天正14年12月12日（1587年）1月20日）戸次川の戦いで死亡、享年22才）も、正室は石谷頼辰女となっている。

このように、長宗我部家は、国親、元親、信親と三代にわたり、美濃の斎藤家を迎えている。斎藤利三は、明智光秀の重臣であり、前室は斎藤道三の娘であったというが、史料的に明確なものではない。後室は、稲葉一鉄の娘であり、斎藤利三、斎藤三存、それに末娘の福（春日局）らを産んでいる。そして、福は稲葉重通の養女となり、江戸幕府の第3代将軍徳川家光の乳母となった。福は、山崎の戦い（天正10年（1582年）6月3日（西暦7月2日）、古来「天王山の戦い」と言われている）の後、義理の叔父である長宗我部元親を頼り、土佐の岡豊城で過ごしたという説がある。長宗我部元親が、天正16年（1588年）大高坂山（現在の高知城がある辺り）に城を移し、大高坂が水害が多い為、3年後の天正19年（1591年）波戸城に居城を移すまで、岡豊（南国市北部地域）は土佐の中心地であった。

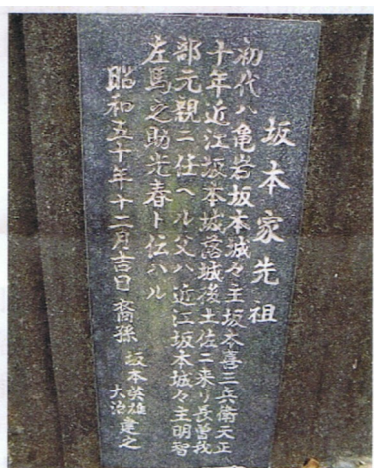
また、南国市亀岩には、昔、坂本城があり、墓石に「坂本家先祖 初代ハ亀岩坂本城々主坂本喜三兵衛天正十年近江坂本城落城後土佐二来り長曾我部元親二任ヘル父は近江坂本城々主明智左馬之助光春ト伝ハル」と書かれた墓もあり、「明智左馬之助光春 妻 明智十兵衛 光秀 長女」と書かれた墓もある。最近の墓石ではあるが、その背後に古い墓石がある。この古い墓石は、斎藤利三の墓と、うり二つである。

坂本龍馬の先祖（土佐での初代）にあたる坂本太郎五郎の墓は、亀岩の隣の谷である才谷にある。太郎五郎は、本能寺の変のあと、明智光春の子どもが土佐に逃れ、旧才谷村に住み着いて百姓になったという根強い伝承があるが、墓の両面には、太郎五郎は本能寺の変より10数年も前に戦乱を避けて山城国から来た者である、と書かれているようである（まだ確認していな

い)。また、大浜家であるが、長宗我部時代の商人(近江商人)ではないかと推測している。

坂本龍馬は明智光秀の子孫なのか

思うに、明智光春(左馬前)の妻は、明智光秀の娘(長女?)ではあるが、坂本太郎五郎の母は、近江商人の女(大浜家の関係者)で、「光秀の娘」の子どもではない、と推測している。父は光春であるが、そういう意味では、「光秀の子孫」ではないと思われる。戦国時代は、政略の為に色々な形態で婚姻をするので、妻や子どもといっても、現代と同様に考えることはできない。本妻がいれば、側室もいる。場合によっては、離



南国市亀岩

(一族)の家紋であり、そういう面から見た方が正確な見方ができると思う。これからそれを実証したいと考えている。土岐氏は、結局は「本能寺の変」

婚し、主人(妻)を変え、こともある。したがって、坂本太郎五郎が土佐にきた時期は、墓に記述されているように本能寺の変の前かもしれない。太郎五郎は、光秀の直接の子孫にはならないかもしれないが、明智一族の子孫ではあることに間違いがないと考えている。また、「明智」というのも、一つの家ではなく、親戚(一族)が大勢いたと考えている。美濃(岐阜県)の斎藤家であるが、斎藤内蔵前利三は、明智光秀の家臣(重臣)であるが、斎藤家は、明智家と同等に、土岐一族である。しかがって、「桔梗紋」であるが、これは明智の家紋というよりも、土岐氏

で滅びてしまったが、福(斎藤利三の娘春日局)を要にして、徳川で再興を図ったのだと想像している。そして、明智光秀も、天海として、「見ざる、言わざる、聞かざる」の中に、再興を果たしたのではないかと想像している。全ては、日光東照宮に封印されてしまったのかもしれない。これを、一つ一つ、ひもといていきたいと考えている。そういう意味では、「本能寺の変」の目的はいつた何であったのか。一義的には、やはり、土佐にいる土岐一族を救いたいという意味もあったのだろうと思う。織田信長にとっては、やはり土佐は脅威だった。しかし、他にも理由があるのかもしれない。時代が下り、坂本龍馬が暗殺された目的(理由)は何であったのか、光秀の「役割」と似かよっている部分があるように思えてならない。

研究というものは、やはり予測を立てて、それを実証していくことだと考えている。仮説、推論、実証である。トロイア遺跡を発見したハインリッヒ・シュリーマンは、幼少のころにホメーロスの『イーリアス』に感動したことが、トロイア発掘を志したきっかけだったそうである。「神話」を、神話だけにはしなかった訳である。地域にあるさまざまな情報(伝承など)を、単に読み流すのではなく、そこから発見すること(光をあて、輝かせること)が、地域学である「土佐学」にも求められるかと考えている。

シュリーマンや司馬遼太郎の時代には、インターネットという手段がなかったが、インターネットが普及して50年が経過した現在、世界中の地域情報が各地域から発信されている。世界は、まさに巨大なデータベースとなってきた。この巨大なデータベースを串刺しにして(駆使して)、地域の本当の歴史(姿)を読み解くことが可能になったと感じる。単に一地域だけの研究では分からない繋がりが、やっと推論できるようになってきた。しかし、そうは言っても、やはり重要なことは、正しい仮説を立てて、地域に足を運んで実証していくことが何よりも重要であると考えている。やっと、「時は今 天が下しる 五月かな」、である。この歌が、48年経った今「それをやってくれ」と語りかけているような気がする。坂本太郎五郎であるが、Yahoo等で検索してみてもいい。「紀氏 土岐」、「大浜 紀氏」など検索すると色々繋がってくる。大浜家は、江戸時代には、近江長浜(山内一豊の居城があった)の大商人(近江商人)になる。「大浜 近江商人」で検索すると、面白い情報がでてくる。5月の「土佐学大会」では、「仮説」「推論」「方法論」の部分を紹介する予定である。